
プレゼント

苺-ichigo-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プレゼント

【NNコード】

N9252M

【作者名】

莓 - ichigo -

【あらすじ】

小学校5年生の後藤麻梨香は、同じクラスの高橋賢人のことを見識し始める。

でも、恋愛はそんな簡単にうまくいくものじゃない。

麻梨香の恋の結末は――！？

麻梨香の小学校5・6年・中学校生活での友情、恋愛を描く青春ラブストーリー。

プロローグ

君が私にくれたもの。

それは、本気で人を好きになる心。

出会ったときはまだ幼かつたけど、

私はあの時から

君が大好きだったよ

。

後藤 麻梨香は、今日から5年生。

だけど、今家のベッドの中。

「あーあ…最悪。」

麻梨香は、登校初日から、水ぼうそうになっていた。

「初日に学校行けないなんて

ありえないつづーのーー！」

落ち込んでた麻梨香を襲つた、もうひとつ悲しみ。

「え……つむりでしょ……。」

配られていたクラス表を見た麻梨香はがっかり。

4年生の時に仲良かつた子とは離れ離れ、

嫌いな女の子が一人。

麻梨香の服をなめてきた男子とは、結局6年間ずっと同じクラス。

あとは知らない人ばかり。

こんなクラスで、

しかも最初の一週間クラスからいなくて、

麻梨香にはむやんとやつていけるのか、という不安が押し寄せてきた。

それでも、登校した一週間後。

麻梨香がいない間に、世界は変わっているかな～って、思っていた。

もう、女子のグループとかもできちゃっているかな～って。

「おはよー!」

びっくりした。

だつて麻梨香に声をかけてくれたその子は…

神田 美咲子、かんだ みさこ 麻梨香が嫌いだつた女の子のうちの一人だつたから。

「 麻梨香のロッカーに、名前シール貼つといたからね 」

初対面だけど、麻梨香は美咲子のこと、嫌いじゃなくなつていた。

「 …すゞく、いい子じゃない。」

しゃべらず嫌いで、勝手に嫌つていた自分が恥ずかしくなつた。

ぐるっと教室を見渡して…

とりあえず、4年生の時も同じクラスだつた、宝木たかき 梨沙りさ に声をかける。

「おはよー。」

「あ〜〜、麻梨香〜〜おはよ〜〜もう大丈夫なの?」

「うん、大丈夫!弟につつされちゃつたら〜〜・・・・

「 そりだつたんだ。大変だつたね。」

「うん。」

それで梨沙は、また話してた子たちとおしゃべりを始めた。

う〜ん…あと知つてゐる子は…

やつ思つて教室でしゃべつている子たちを見ていたら。

「おはよー。」

声をかけてくれた子がいた。

「おはよー！ってあれ？」

前同じバレエスクールだったよね？」

「うん！覚えててくれたんだ？」

「うん。」

その子は、坂井 詩歌。

一年生の時に入つた、バレエスクールにいた子。

そしてその隣に…

(「…詩歌、この子と仲いいの…？」)

麻梨香が嫌いな、小口 李弥。

「おはよー。」

小口さんは、声をかけてくれた。

「もつ大丈夫なの？」

…あれ？意外と普通…？

「うん、大丈夫！心配してくれて、ありがとう。」

「よかつたあ～、学校こないから、心配していたんだよ。」

「うわあ…見た目のファッショングが黒いから好きじゃなかつたけど、性格わりと普通かも…。」

一日目で、嫌いだった二人のいいところを見つけられた。

嫌いだった二人のこと、嫌いじやなくなつた。

見た目やしゃべれないってだけで人を嫌いになつちゃいけない。

それは、きっと、一人から麻梨香への、

プレゼントだ。

続く。

第1話*

風が心地よくなつてきて、
新しいクラスにも慣れ始めたころ。

麻梨香は、新しい、そしてびっくりな事実を知つた。

うん…まあ、特に珍しいことじやない。

同じクラスの、高橋のお父さんと、

麻梨香のお父さんの働く職場が同じだった。

ただそれだけのこと。

麻梨香のお父さんは、車会社の課長だ。

そして高橋のお父さんは、同じ会社で働いていたらしい。

これを知るきっかけになったのは、担任の言葉だった。

「 そういえば、後藤のお父さんと高橋のお父さんて、
同じ会社で働いてるんだよなあ？」

この言葉を聞いたとき、麻梨香はそもそも高橋といつ人を知らなか
つたから、

頭の中は疑問符だらけ。

一方の高橋は、先生の「」の言葉を

麻梨香の後ろで聞いていたらしい。

高橋はなんと、麻梨香の後ろに座っていた。

「え、マジで！？俺、今日父ちゃんに聞いてみるわー。」

そうこうした高橋の笑顔は…

初対面と言つていいほど麻梨香の顔には、

(うへへん…猿?)

程にしか映らなかつた。

* * *

次の日、麻梨香が椅子に座つて教科書を鞄から出してみると…

「おっはよー！」

高橋が登校してきた。

「俺の父ちゃん、お前の父ちゃん知つてんつー。」

そう言いながら笑つた高橋は、猿、だつた。

(はつ！私、お父さんに高橋のお父さんのこと聞くの忘れていた…)

「あ、あの…」

「お前の父ちゃん、準教授なんだ？
俺の父ちゃんも…」

「私、お父さんと、高橋のお父さんのこと聞くの、忘れてたの！
「めんねー！」

「こや、べつにこいつて…んなことぢりでもこことだしお。」

麻梨香は、さつと、このとおり、

高橋としゃべった瞬間から

高橋の、人を惹き付ける人柄に惚れたんだ。

それからとくにこのもの、麻梨香は、高橋のことを意識してしまい、
しゃべることもひと苦労になってしまった。

だけど、弥季みわが高橋や、高橋と一緒にいる河野こうの、竜矢たつやと仲が良かつ
たので、たくさん話す機会ができたことが嬉しかった。

(話してくる内容がほとんどもネタだったのはちょっと勘弁、だ
つたけれど…)

季節はあつといつ間に夏。

蝉が暑苦しく鳴き始め、口差しがだんだん強くなってきた頃。

学校は、終業式を迎えた。

麻梨香の今年の夏休みは、忙しい。

首都圏を受験することにしている麻梨香は、

あと2年で中学受験なので、それに向けて今年からバリバリのスケジュールだ。

毎日6時間の講習。

週に一回のテスト。

小5の麻梨香には多少きつかつたが、

3年生の時からの親友との約束がそれを忠実に守らせた。

「一緒に受験して、一緒に電車で通おうね。」

それは、小さかつた一人の、大きな目標だった。

高橋は麻梨香の行っている塾のすぐ近くの塾だ。

麻梨香は、塾に行くたびに、いるはずのない高橋の姿を探した。

そして、小さくため息をついた。

塾では会えなかつたけれど、学校で高橋の姿を見ることはできた。

麻梨香は合唱部だったので、

合唱が終わると、校庭の鉄棒に座り、

野球部の練習を眺めた。

泥だらけでボールを追つたり、

走つたりしている高橋は汚かつたけれど、

頑張つている高橋が好きだつた。

だからいつも小声で応援していた。

「がんばれ」と。

忙しい夏休みは、飛ぶように過ぎ、

あわただしく2学期が始まつた。

2学期が始まつて1週間もすると、運動会だ。

麻梨香は今年、紅組。

クラスでも紅白の半分に分かれてしまつたのだが…

運よく、高橋と同じ組になれた。

そして続く色別集会。

団長は6年生、そして、高橋と麻梨香は、応援団に入った。

「頑張りなー。」

「おひめー。」

威勢よく交わした声。

その日から、毎日、昼休みに応援団の練習が入った。

「高橋ー！今日も練習ー。」

「おー、行ひばーーー。」

「暑いのにめんどくさいなー。」

「じゃあならなきよかったな。」

「ひんーー。」

行く途中で交わした言葉は他愛もないことだったけれど、

暑さに負けず、麻梨香の心を温かくした。

そして迎えた運動会当日。

精いっぱいの応援。

力限りの競技。

紅組は…

優勝だつた。

「やつたあ！」

みんなで手をたたき合つた。

6年生は、泣いていた。

最後の運動会でいい思い出を残してあげられたと思つと、

ちょっとぴり、麻梨香も泣きたい気持ちになつた。

「後藤、来年も、応援団一緒にやるつな。」

そういう高橋の笑顔は、

麻梨香の目には猿と映らなくなつていた。

第2話*

「後藤、来年もいつしょに応援団やひつな。」

あの言葉は、ウソだつたの…?ねえ、高橋。

「それでは今年の紅組の応援団長は佐藤くん、副団長は後藤さんに決まりました～～！」

パチパチパチ。

みんなが拍手してる。

でも麻梨香にはその音は聞こえていなかつた。

(なんで…一緒に応援団やるって言つてたのに…。
「俺、団長やるからお前、副団長やれよー。」つて、言つてたのに….)

当の高橋は、ぼけーーっとしていた。

季節は6年生の運動会、秋。

夏の暑さがじりじりと残るこの季節、

麻梨香たち6年生にとっては最後の運動会。

母親に「副団長になつた」と伝えると、

母親は「あら、じゃあ衣装をつくれかしらねえ??.あの衣装古いもの。」

と、俄然やる気だ。

でも、麻梨香はすつきりした気分ではなかつた。

どうして応援団、やらないんだろう。約束したのに…

卷之三

麻梨香は紅組の先頭に立つて、走り抜ける。

「紅組行くぞ――――！」

Г Г Г Г Г Г Г Г

「白組行くぞ——！——！」

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

「青組行くぞ――――――！」

生徒たちの声が、運動会日和の晴天にこだまする。

誰もが、頑張りうといつ活気に満ちあふれていた。

種目は進んでいく。

1年生の徒競走。

2年生の球ころがし。

3年生の玉入れ。

4年生のムカデ競走。

5・6年生の男子の騎馬戦。

5・6年生の女子の背中渡り。

青空の下を駆け抜けると、秋の風が頬をかすめる。

心地よい気候の中、

最後の種目が行われる。

男女別選抜リレー。

校内の中から選抜で速い人を各クラスから男女各一人名選出。

運動会の見どころだ。

そのリレーには、高橋も出ることになっていた。

麻梨香は、足が遅く、補欠にさえなれなかつた。

「パーン

リレー開始のピストルが鳴り響く。

最初は3年生。

3年生もなかなか速い。

だんだんと高学年になり、

最後に6年生。

団長の佐藤も出ていた。

「佐藤　　！がんばれ――！」

「いけ――――！」

みんな、精いっぱいの応援。

最後の運動会、勝ちたい。

その思いは、誰もが持っている。

「高橋！最後まで負けないで！」

汗を流しながら必死に走る高橋に聞こえるよう

精し二はしの大声で言つた。

「あけせや
ため」

優勝は…青組です！！

青組の応援歌が流れる。

紅組は、最下位だった。

最後の運動会、優勝できなかつたのが悔しい。

けれど、麻梨香は満足だつた。

大好きな高橋のこと、精いっぱい応援できた。

自分が副団長として引っ張ってきた、この組を、

最後まであきらめないで応援できた。

そのことが、何よりの誇りであり、

きっとその心は、誰から麻梨香への

「諦めない気持ち」について前の話が前のプレゼントだったから。

* * *

運動会が終わると、待っている行事は修学旅行だ。

このクラスで、最後の大きな行事…

京都で、たくさん想い出を作ろう。

そして、悔いのないようこの学校を離れよう。

受験も迫つてこる麻梨香は、強く心に誓つた。

続く。

第3話*

9月29日。

運動会が終わってすぐのこの季節、

6年生にとって最後の大きな行事・修学旅行。

麻梨香たちも、毎年恒例の奈良・京都への修学旅行に出かける。

臨海学校・林間学校・修学旅行では、グループ分けされる。

先生たちが決めた、ランダムなグループだ。

麻梨香は、必死に、一つだけ、ただ一つだけ、願っていた。

どうか、高橋と同じ班になりますように…

班が一緒になれば、電車の中の席も隣・近くになれる。

最後の思い出作りには、運が必要だった。

詩歌にも弥季にも、

「一緒になれるといいね！」

と言っていた。

グループ分けの結果は、9月25日に発表された。

麻梨香のグループは

「後藤・坂井・小口・高橋・河野だ」

先生の口から出でてくる名前に、

麻梨香たちはただ、びっくりしていた。

そして、数秒後には、

3人で抱き合つてた。

ほんとうに、奇跡だと思ひ。

仲良し女子3人組と、仲良し男子2人組が一緒になった」と。

「麻梨香つ！ よかつたじやん。」

弥季が小声で言つて、つっこてきた。

「...」
「...」
「...」
「...」
「...」
「...」
「...」
「...」

麻梨香は、ただただ、

何度も頷いていた。

* * *

修学旅行。

それは小学校生活最後の思い出作り。

麻梨香にとって、本当に、

みんなとの最後の大きな思い出。

今日は9円28円。出かける前日。

実は、一週間ほど前から、迷っていた。

ある、一つのこと

それは、修学旅行で、高橋に気持ちを伝えるべきなのか、とこうこと。

告白なんて初めてだし、今まで考えたこともなかった。

今伝えなかつたらきっと一生後悔する。

そう思つと同時に、怖かった。

もし振られたら、って思つと、

勇気はゼバーン、

風船がしほむみたいに、小さくなつていつた。

みんなに言つたら、さつと、

誰も反対しない。

だつて、麻梨香の気持ちを知つて居るのは、

ほとんど全員だから。

高橋はどうかわからぬけど、

ほとんどみんなが知つて居たから。

だから、誰にも言えず、一人で悩んだ。

第4話*

9月29日。ヒーリング、修学旅行当日。

今の時間は5時45分だが、もうすでにみんな集まっていた。

奈良に行くには時間がかかるから、集合時間が早い。

6時には学校を出発しないと、9時につかない。

みんなは早朝もいといふだといふのよ、

はしゃぎまわっている。

騒いで、走り回って、校庭で鬼ごっこをしている。

朝早いのが苦手な麻梨香はとてもはしゃぐ気にはなれない。

それに加えて毎晩ろくに眠れず、いろいろ考えたものだから、

某・貞子もお手上げ状態の真っ暗ガールになっていた。

やつ・・・

畠山のひと。

麻梨香なりに、考えたつもりなのだけれど・・・

「いやいや、いい答えは見つからなかった。

「前もって考えておくべきことなのかな?」

「いつも」と、考へる必要がないよつて思えてきて……

「たくさん悩んで、こまかに考えたけど、

結局、その場の成り行きに任せてしまふ、とこうじになった。

「キイイイイイイイイ。」

マイクの嫌な音。

校長先生が話始めるところだ。

「ええ、みんな、おまよひいれこます。」

「おはよー、じやこまーーす。」

朝っぱらから元気な生徒たちだ。

「今日は、朝早くからお疲れさまでした。」

「よいよ待ちに待つ修学旅行です。」

「楽しい思い出を、たくさん作って帰つてしまおうね。」

先生の話が終わると、修学旅行2日分の予定の紙を配られた。

「今日は向こうに着いたら、昼食を食べ、

お店などを見た後宿に行つてゆつゝする。

そして、明日、

金閣寺を見に行く。

たつたの一泊一日だ。

その短い旅行を楽しむために、

みんなはこんなにもはしゃいでいる。

麻梨香は、自分が6年生だ、といふことを改めて実感した。

気が付いたら、みんながバスに乗り始めていた。

「駅まではこのバスで行くんだって。

麻梨香も、乗ろつ！」

そう言つてくれたのは詩歌しげかと李弥りみだった。

「うんつー。」

まだ暑さがちよつぴり残る秋の初め。

麻梨香たちは、修学旅行へと出発した。

* * *

「うわあ~~~~~。」

すゞい・きれいなとこね。」

みんなの気持ちを、詩歌が代弁した。

麻梨香たちが泊るとひね、

紅葉しかけたモリジが山につぼに広がるのが見える、

景色のいいホテルだつた。

部屋割は、グループが一緒の同性同士…

「李弥つ！ 詩歌つ！

部屋一緒にだね！！」

「ほんとだあ-----！」

「楽しみだね-----！」

部屋に荷物を置いた麻梨香たちは、

早速買つものに出発。

「あ、これがわいい！」

「これも―――！」

「うわー、Jのアイスおこし―――！」

あちこちから声が聞こえる。

ふと立ち止まつた麻梨香の田井、

「恋愛成就御守」

ところづ字が飛び込んできた。

「恋愛成就、かあ・・・」

一瞬、買おつかな、と気が揺らいだ麻梨香だが、

「でも、御守に頼っちゃダメだよね。」

と、買づのをやめた。

結局麻梨香が買つたのは、

李弥たちとお揃いのモニジのストラップと、

花柄の丸い玉が付いている

ピンクと青の色違いのストラップ。

花柄の玉付きストラップは、

誰かとのお揃いってわけで買つたんじゃない。

いつか

麻梨香の初彼になつた人への、

プレゼントとして。

なぜかはわからないけれど・・・

ただ、そういう気分で買ったものだ。

だから、誰にも内緒で買って・・・

誰にもわからぬいよしき、元の

引き出しの奥にしまっておいた。

* * *

あつとこづまに一日目は終わり、

お風呂も入つて、夕飯も食べて、

あとは寝るだけ、となつた。

ここで、ただ寝るだけ、にしないのが修学旅行。

今の時刻21時から、就寝時刻の22時30分までは自由時間として使っていいことになつていた。

前々からクラスで決めていた遊び・・・

罰ゲームトランプ！！

罰ゲームが書かれたトランプでババ抜きをし、

一番最後にジョーカーを持つていた人が

一番に上がった人が罰ゲームいつ。

負けた人は、その人が命令したことをやらなければならない。

そういうルールのゲームだ。

参加資格なし、希望者のみ参加のこのゲームに参加したのは、

クラスの半分程度・・・15人。

もちろん、麻梨香や詩歌たちも参加した。

一人ずつにカードが手渡されていく。

罰ゲームババ抜きが始まった。

慎重に、慎重に、一人ずつカードを抜いていく。

ときには悲鳴が上がったり、

冷やかしがあつたり・・・

一回目は、美沙子みさこだった。

命令者は・・・河野。

「なにがいいかな～・・・」

河野は悩んでいる様子。

そこに、片桐かたぎりが耳打ちした。

「#\$%&@ *+?」

なんて言つたのかは聞こえなかつたけど、

河野がニヤツと笑つたように見えた。

「神田！五百重いじゅうに告白ごひつしてこいつ！」

河野が叫んだ。

「ヒュ～ヒュ～！」

口笛がなる。

五百重つて、たぶんクラスで一番モテてるヤツ。

美沙子は、きっと五百重のことが好きだ。

勝つた人への否定は通用しない。

反抗も通用しない。

それがわかつっていたから、美沙子は五百重の所に行つた。

告白タイムは、みんなに見られるものではないから、

1つの部屋を2人が占領して、ドアも閉め切つて、

誰も見れないところで2人つきりの世界。

もちろん部屋の外は野次馬だらけだけど。

「・・・」

美沙子が出てきた。

でも様子が変だ。

なんかオーラが出てるよつな・・・?

「どしたの? ?」

「どうだつた? ??」

野次馬が一斉に口を開く。

一番近くにいた麻梨香も、じつそりと耳打ちで聞いた。

「・・・あのね、ちょっと・・・。」

「ん? ?」

美沙子は麻梨香に耳打ちした。

『アーティスト』

美沙子は、『あのね、付き合いつ』になつたの。』

といったのだ。

麻梨香と一緒にいた李弥たちもそれが聞こえていたらしく、

その話は野次馬たちにいふせうに広まつた。

思いがけず、修学旅行の罰ゲーム告白でカツバルかひと組誕生してしまったのだ。

その思いがけない出来事にみんなびっくりして、

就寝時刻の22時30分までまだ30分くらいあつたけれど、

罰ゲームトランプは終わりになつた。

麻梨香たちも自分たちの部屋に戻り、

布団に入りて

でもまた寝るねになし

恋バナが始まつた。

「麻梨香つ明日高橋に告りなよつ――――！」

いきなり李弥が言つたので麻梨香はびっくりして飛び上がつた。

「ええ～～～っ！…？」

「だつて、せつかくの修学旅行だよ…？
チャンスじゃん…！」

「いや、でも…？」

「麻梨香は、そんなんだからこつもだめなんだよ…！」

恋愛なんぞしない詩歌に言われるとは…。。

「こやひ、でも、わやんと自分で考へてしまふんでっ！」

（麻梨香はやうやくこいつと、バサッと布団にもぐつりんだ。）

（こやこやこや、わよつと待て、明日また～～～！？）

やつがえると、心臓がバクバクだつた。

続く。

第5話*

修学旅行3日目。

揺られるバスの中で、麻梨香は黙りこくれていた。

「 麻梨香、明日高橋に会つひやいなよー。」

昨日詩歌たちに言われた言葉が、麻梨香の心の中で繰り返されていった。

今日、告白してしまえば、楽になる？

今日、全部を言つてしまえば、もう苦しまなくていいの？

違つ気がした。

あつと、告白しても振られるだけ。

そもそも、麻梨香たちはまだ6年生だ。

告白して、じつなるの。

けれど、麻梨香には『受験』といつ言葉の壁がある。

タイムコマッシュはあと半年もない。

今ここで、気持ちを言わなかつたら、伝えなかつたら、もしかしたらもう一生、高橋とは会えないかもしね。伝えられないかもしね。

麻梨香の心の中は、たつた一つの選択肢だけで、風船みたいに膨らんでいった。

* * *

午後12時。

昼は、ホテルでもうつてきたお弁当を広い公園のよつなどりでみんなで食べることになつてゐる。

麻梨香は、詩歌や李弥と一緒に食べよつと、一人の元へ行った。

「詩歌、李弥、一緒に食べよつ」

「「いいよつー。」」

3人がお弁当を広げ始めた時。

「いいでいいかー？」

「いんじゅね？」

「んじゃ ここで食べるか。」

「いただきます」

片桐・河野・高橋たちの声だ。

高橋が、すぐとなつて「飯を食べてこる

やう思ひと、麻梨香は全然食が進まなくなってしまった。

「うわあめでった。」

結局、麻梨香はほとんどのおかずを残してしまった。

ホテルの人には申し訳ないけれど

とても、全部食べられるような状況ではなかった。

「トランプやんね？」

片桐が言つだす。

「いーねつーやひつ

「あたしもやるやるやーーー。」

詩歌たちはノリノリだ。

「罰ゲーム付きな。」

「OK。」

「後藤、おまえはジーさんの? やるの?」

麻梨香は迷った。

罰ゲームといつたら、たぶん麻梨香は告白させられるに違いない。

でも いつまでも逃げるわけにはいかなかつた。

「・・・・・うそ、やめるよ」

「よし、じゃあ・・・6人な。」

トランプが配られる。

麻梨香は、李弥にもりい、高橋に渡すといつポジションだ。

「ひいっ・・・・・」

麻梨香がひいたのはババだった。

つまくシャツフルし、高橋に回す。

「うわっ、ハメられたー・・・・

ババはどうどんみんなのところを回つていぐ。

そして4人が終わり、最後の3枚の行方が麻梨香と片桐にゆだねら

れた。

麻梨香がひいたトランプは

ババ。

麻梨香の持っていたトランプは古桐のものと一致して、

麻梨香の負けと云う形で終わってしまった。

罰ゲームは・・・河野を見ぬく。

「ふはり、おまえ、エリセもつわかつてんだろ、罰ゲームの内容。

」「ハ・・・・やつぱり・・・」

「せっせつめ、告白して来いつー。」

「わー——————」

して来いつてこいつ、「ソレでしるつて感じだ。

迷つたけれど・・・

【わたしね・・・びっくりしないでね。

わたし・・・高橋のことiga・・・つ好き・・・なのつー】

みんなの前で言ひのせやつぱり恥ずかしかった。

だから、そつと、高橋の前によつて行つて、

高橋だけに耳打ちした。

高橋が驚いた顔で麻梨香のほうを見つめている。

気がつけば、周りを麻梨香のクラスの生徒が囲んでいた。

「・・・」

シーンとこう音が聞こえそうなほど、静かな公園。

鳥の声も聞こえない。

あたりを静寂が包み・・・

今度は、高橋の顔が麻梨香の耳に近づいた。

【それ、ほんと?】

【うん、てかたぶん、高橋以外全員知ってる。】

【あのや、つれしつてかわ、おれも、後藤のこと好きなんだけど。】

「・・・つー」

【でもな、おれたちつて小6だろ?】

【今ままじや、ダメ?】

【今いまつて・・・?】

【ふつーにしゃべったり、ふつーに仲よくする。】

【いいよ。】

【あ、それこのことは誰にも言つなよ?
俺らだけの、秘密だから。】

全部、内緒。

みんなには内緒の、一人だけの話。

周りのみんなは、しゃべり終わつたらしい一人を見て、

「何しゃべつてたの?」

と聞きた気だつた。

でも、二人の、秘密。

みんなには、内緒。

伊藤などは勘がいいからもしかしたらまたうわさを流されてしまつかもしれない。

それでも、一人で内緒話をした時間は、

麻梨香にとつてはかけがえのない宝物

思い出。

高橋からのプレゼントのようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9252m/>

プレゼント

2010年10月13日05時35分発行